

平成 30 年度 「書の表現(応用)」シラバス	単位数	2 単位	担当者	東徳嶺 輔
	対象学年	2・3 年次	使用教科書	学校作成教材による

1 学習の到達目標及び評価方法等

学習到達目標	<p>1 書道における幅広い創造的な活動を通して、生涯にわたり書を愛好する心情広い視野から書の文化や伝統を尊重する態度を育てる。</p> <p>2 書を理解しこれを楽しむ態度を通して感性を磨き、日常の生活に役立つ実用的な書の表現能力をより一層高める。</p> <p>3 書道検定などに積極的に挑戦し、その取得を目指す。</p>
課題・提出物等	<p>1 毎時提示された課題(作品等)を提出する。</p> <p>2 授業中に書いたものは、基本的に試書、添削を受けたもの、清書を問わずすべて提出する。</p>
評価方法	<p>1 提出作品等。その枚数や内容を中心に用具用材の扱いを含めた学習活動への参加の態度などをもとに総合的に評価する。</p> <p>2 発言、本読み、板書など積極的な態度には、加点もある。</p>
評価の観点	「関心・意欲・態度」、「書表現の構想と工夫」、「創造的な書表現の技能」、「鑑賞の能力」の4つの観点で評価する。

2 学習計画

学期	月	学 習 内 容	時数	学 習 の ね ら い	備考
前	4	毛筆検定2・3級の実技領域とその内容 ①漢字と仮名 ア 楷書 イ 行書 ウ 平仮名 エ 片仮名	6	<ul style="list-style-type: none"> 楷書を正しく美しく書くことができる。 行書を正しく美しく書くことができる。 平仮名・片仮名を正しく美しく書くことができる。 	
	5	②文章 ア 漢字仮名交じり文 イ 掲示	8	<ul style="list-style-type: none"> 漢字仮名交じり文を正しくかつ体裁良く書くことができる。 簡単な掲示を正しく効果的に書くことができる。 	
	6	毛筆検定2・3級の理論領域とその内容 ①国語の表記法 ア 常用漢字の字体・音訓・筆順 イ 現代仮名遣い・送り仮名 ウ 符号の使い方	8	<ul style="list-style-type: none"> 常用漢字の字体、音訓、筆順に関する知識、理解をもっている。 現代仮名遣い及び送り仮名の付け方に関する知識、理解をもっている。 区切り符号その他の符号に関する知識、理解をもっている。 	第1回 書写検定
期	7	②その他 ア 草書を読む イ 毛筆書写に関する知識	6	<ul style="list-style-type: none"> よく用いられる平易な草書を文の中で読むことができる。 毛筆書写に関する用具・用材(筆・墨・硯・紙)などについての一般的な知識、理解をもっている。 	
	9	実用の書に根ざす書活動 ①篆刻 ②刻字	8	<ul style="list-style-type: none"> 姓名印を刻し創作作品に押印します。 朱文印を刻します。 刻字により書作品を作ります。 (1) 書稿を作成する。 (2) 書稿に薄紙をのせ籠字をとる。 (3) 籠字を板に糊付けする。またはカーボン紙で写す。 (4) 彫刻刀で刻る。 (5) 下地と文字部着色する。 	

後	10	③ろうけつ染め、マーブリング ④命名、賞状	8	・墨流しを体験する。 ・命名や賞状といった細字の分野にも挑戦する。	
	11	⑤仮名の書 「百人一首でカルタを作ろう」	8	仮名の成立と種類について学習します。 (1) いろは歌の学習 (2) 連綿や散らし書き (3) カルタの制作	第2回 書写検定
	12	⑥年賀状	6	・表面が体裁良く書くことができる。 ・十干十二支について理解できる。 ・裏面にはどのような文章やデザインが適しているのかを学習します。	
期	1	漢字仮名交じりの書における 「作品制作」 ①素材の生かし方 「文字の大小・太細」 「墨の濃淡・潤濁」 「配置の工夫」	6	・学習した漢字または仮名の古典をもとに漢字仮名交じりの書の創作を行います。 ・その前に、それぞれの素材をどう工夫することで、充実した作品が作れるのかを学習します。	第3回 書写検定
	2	②作品制作	8	次のような手順を経て行います。 (1) 詩文の選定 (2) 表現意図の明確化 (3) 表現法の検討 ・作品の形式 ・用具・用材 ・用筆 ・構成 (4) 草稿の作成 (5) 試書——推敲——仕上げ 完成した作品について互いに鑑賞し文章にまとめ発表します。	
	3	③裏打ち、表装	6	自分が制作した作品を自分の手で裏打ちし、パネルに表装します。	

確かな学力を身に付けるためのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> ・書道の学習においてはまずよく見るのが大切です。自らの感性に基づき対象となる作品に素直な気持ちで向かいましょう。 ・得られた感想は何に由来するものか、用具・用材、構成といったさまざまな要素について考え分析する姿勢が大切です。 ・技法の習得にあたってはただ練習の枚数を重ねるのではなく自分が解決すべき課題や問題点を明確にしておくことが大切です。 ・鑑賞においては感じたことを的確に表現する自分自身の言葉を捜していきましょう。
授業を受けるにあたって守ってほしい事項	<ul style="list-style-type: none"> ・授業はチャイムと同時に始めますので、用具を準備し着席を完了させて下さい。 ・用具は個人の所有の物、学校の備品ともに大切に使いましょう。特に、筆と硯はきれいに洗いましょう。